安田女子大学紀要　40，225−236　2012.

領域「表現」の授業を通して豊かな感性を育てる
――高知県郷土楽器「鳴子」を使った大学生による試み――

粟　村　眞　久

Durch das Unterrichtsfach “Ausdruck” eine reiche Empfindungskraft schulen: Ein Versuch der Studenten, das Heimatinstrument “Naruko” der Kouchi-Präfektur zu handhaben

Masahisa Awamura

Ⅰ．問題と目的

子どもたちの感性や想像力を培うには表現活動が有用であるとされる。将来，保育者を目指す学生たちにとって，感性や想像力を養うことは重要な課題であるといえるが，果たして学生たちが保育活動の中で，子どもたちの表現活動を援助し，導いていくだけの感性や想像力，表現力を持っているのであろうか。さらに領域「表現」で要求されている豊かな感性を持っているかと問われれば首を傾げたくなるのが現状である。

最近，さまざまな情報が氾濫，錯綜しているなかで学生たちの生活体験は少なくなり，想像力の貧困さが目立っている。それを補う意味も兼ねた授業展開の中でいかにして感性を育てさせるかが大きな課題となる。そこで筆者はそのための表現活動やまだ目覚めていない感性に刺激を与え，想像力に幅ができる活動を授業の中に取り入れてきた。

現在，本学児童教育学科２年の領域「表現」の授業では，総合表現（音楽，造形，身体）の一つとして高知県郷土楽器「鳴子」を取り入れ，その授業を通して学生たちに感性への意識変化を促すべく授業を展開し，それを授業のねらいとしている。「鳴子」を取り入れている理由はまずは老若男女が扱いやすい楽器であること，教材[1]として手に入りやすい。また，特に幼児期にリズムを養うことは大切であり，自然に身につけていく良い時期でもある。鳴子を使うことによって生まれる音は澄んだ，心地よい音であり，活気がある。従って，幼児期の身体表現にも小道具として扱う「鳴子」は最適であると考えているためである。

本稿は鳴子を取り入れた「表現」の授業内容及び，総合表現活動によって如何に感性が育つかについての検討を試みたものである。その際手続きとして，授業での表現活動の後，学生に感性に関するアンケートやインタビューを実施し，「表現」の授業を受講したことにより感性が育つ効果について考察を行うこととした。

1）「なるこ」セット（ダブル）〈組立済。２個入り〉（株）クラフテリオ

Ⅱ．感性をどのように考えるか

感性と言う言葉は度々耳にするし，よく話題にされる。では感性をどのように考えたら良いか。“感性”[2] という語はいろいろなところで用いられている。保育の場で使用される「感性」は多様な見解があるが，大きく分ければ①感覚②感受性③価値認識と３通りの意味で使われている（藤江・梅澤，1993：17）。感性は自然や生き物などとのさまざまな出会いに遭遇し，その場で受ける感動が蓄積されて感性として内在化されるものである。一方，価値認識としての「感性」は実験や調査にもとづく合理的な推量や計算からではなく，感情的・主観的な価値基準（好き，嫌い，可愛い，かっこいい，かわいそう，嬉しい，悲しいなど）にもとづいて直観的に判断する働き（藤江・梅澤，1993：17）と捉えられている。保育者はこれらの感性をさまざまな保育の活動の中で幼児同士とコミュニケーションを取りながら表現していくことが大切である。

この幼児期に育つ「感性」は今までどのように扱われてきたのであろうか。「感性」は生涯に渡って楽しい生活やさまざまな価値観を左右する源になると考えられる。

Ⅲ．保育現場における感性の取り扱い：幼稚園教育要領　領域「表現」の推移

「音楽リズム」から「表現」への変遷を見ていくと，昭和に入り幼稚園唱歌教材が戦時下（昭和16年12月第二次世界大戦が勃発）の音楽教育軍国調[3] を音楽的立場から見直され，昭和31年制定「幼稚園教育要領」より６領域「音楽リズム」という言葉が使用されるようになった。昭和39年３月23日文部省告示第69号「幼稚園教育要領　音楽リズム」の内容を見ると次のような内容である（古市・遠藤・寺尾，2001：99）。 1．のびのびと歌ったり，楽器を弾いたりして表現の喜びを味わう　2．のびのびと動きのリズムを楽しみ，表現の喜びを味わう　3．音楽に親しみ聞くことに興味をもつ　4．感じたこと，考えたことなどを音や動きに表現しようとする　があげられる。平成元年から施行された幼稚園教育要領は以前の６領域の「音楽リズム」は包括され５領域中の一つ「表現」となり今日に至っている。この「表現」（音楽，身体表現，造形）は感性と表現に関する領域である。ここでは「表現」のねらいと内容がどのような変遷を経て今日の形になったのかを検討するために平成元年から平成20年に幼稚園教育要領　領域「表現」の改訂された部分を列記し，５領域中の「表現」のねらいと内容の推移を見ていく。変遷を見るに当たって改訂になった部分のみを示す。

平成元年幼稚園教育要領を改訂（以後，改訂年のみを示す。また，改訂部分について筆者が下線をする）領域「表現」の平成元年の目標は下線の部分「豊かな感性を育て，感じたことや考えたことを表現する意欲を養い，創造性を豊かにする」が，平成10年改訂を経て現在平成20年改訂では「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする。」になっている。文言の表現は大幅に変えられているが，目標の礎は変わっていない。ただし，「自分なりに表現することを通し」と具体的に個の強調が伺える。

2）新村　出編　2008『広辞苑　第六版』　感性　p. 636　岩波書店
　感性とは sensibility（英），Sinnlichkeit（独）①外界の刺激に応じて感覚・知覚を生ずる感覚器官の感受性②感覚によってよび起こされ，それに支配される体験内容。従って，感覚に伴う感情や衝動・欲望を含む。

3）嶋田由美（1988）「明治期の唱歌教材に見る子ども観の変遷」音楽教育研究54　54–65

(1)　領域「表現」の「ねらい」について

平成元年改訂では「ねらいは幼稚園修了までに育つことが期待される心情，意欲，態度などであり，内容はねらいを達成するために指導する事項である。」とあるが，平成10年，20年改訂同様に「生きる力」が強調され，「ねらいは幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情，意欲，態度などであり，内容はねらいを達成するために指導する事項である。」これは平成10年改訂の幼稚園教育要領の基礎的な考えとして，“自分で課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力”など，ゆとりの中で「生きる力」を育む観点から平成10年改定以来「生きる力の基礎となる」が強調されている。

(2)　領域「表現」に示す内容について

平成元年改訂では「幼稚園における生活の全体を通じ幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであること，内容は具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない。」とあるが，平成10年，20年では改訂同様に，内容は幼児が環境にかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない。と環境にかかわることについて強調されている。この幼稚園教育要領改訂から指導案を示すときに常に幼児の活動と環境は同時に表されるものとなっている。

領域「表現」の内容に示す平成元年と平成10年の幼稚園教育要領改訂は同様であるが，平成20年改訂で部分的な変更が成されている。変更の部分をあげると次のようになっている。内容の中の（1）生活の中で様々な音，色，形，手触り，動きなどに気付いたり楽しんだりする。平成元年から平成10，20年改訂では「感性」に関する文言が加えられ，書き改められ，（1）生活の中で様々な音，色，形，手触り，動きなどに気付いたり，感じたりするなどして楽しむ。とあり，その他は以前と同様である。

以上の変遷を通してまとめていえることは，前述した領域「表現」の内容から「感性」に関する文言が示され，「感性」に関する文言を強調し書き加えられている。

学生の総合表現にこれらの文言を置き換えてみると，学生たちがグループ毎にイメージすることが一つにまとまり，それぞれの心から湧き出る想いやそれに伴った表現のアイディアを学生たちの意見総意による表現の形として創りあげることであろう。そして，自分たちで見つけた課題を体全体で感じ，その気持ちを土台に表現しようとする自分たちの思いを楽しむことができるであろう。

以上Ⅱ，Ⅲのことを踏まえて「表現」の授業では「表現」内容（6）音楽に親しみ，歌を歌ったり簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。表現内容（8）自分のイメージを動きや言葉などで表現し，演じて遊ぶ楽しさを味わう。に焦点をあて授業を通して豊かな感性を育てるための総合表現の試みを行っている。以下その手続きおよび結果について検証を行う。なお，授業では以下の理由から「鳴子」を使用した展開を行っている。それは鳴子を幼児が扱う楽器としては容易で，叩き方によっていろいろの音色が楽しめ，感性の育成に繋がると考えるからである。

Ⅳ.　授業の展開方法

授業は大学１年で行った音楽基礎理論を土台に，幼児音楽（うた遊び），（がっき遊び）などを

学んだ実技の蓄積結果を基に「表現」の集大成として「鳴子」を使った総合表現すなわち音楽，身体表現，造形を合わせた表現を実施している。

本授業において，この活動は最初に下記のような観点（1)～(6）を当該クラス（１～３組）の学生たちに周知する。次いで，約42人からなる各クラスを１グループとしてそれぞれの課題について話し合うように促し，身体表現の全体を作り上げていく方法をとっている。ここで重視していることは自分たちの感じる自然な動きやアイディアを大切にまとめていくことである。以下のことを理解して総合的な表現（身体表現）を作る。

(1) 指導者から受講生全員に活動の目的とねらいについて伝える。

(2) 総合表現（音楽，身体表現，造形を合わせた）について伝える

(3) グループ毎に代表者を設け，代表者を中心に課題をどのような形で進めていくか，個人の意見をまとめる。

①グループ別活動に先立ちまず，クラス全員で郷土楽器高知の「鳴子」の色付けについて話し合い考えを膨らませる（全体の代表者２名を選ぶ)。(造形的表現領域)

a. テーマに沿ったクラス全体をアピールする色にする。

b. それぞれのグループ毎で色を変える（グループ毎で主張する内容に伴った色に統一するなど)。

②クラスとしての身体表現全体のテーマを考える（クラス全体の代表者２名）(身体表現的領域)

③クラスとしての全体のテーマに沿った，幼児を対象とした音楽を選ぶ（全体の代表者２名）(音楽的表現領域)

(4) 身体表現を作るときの決まり

①幼児を対象とした動きを作る。(幼児の出来る動きは限られているのでこの授業ではあえて，大人の動きを考える)

②各グループ代表者２名を決める

③クラス全体で選択した曲全体をおよそ５つに分けて，小グループ毎に動きを考える（まずは音楽全体の小節数を数５等分する)。曲全体を５つ位に分ける意味は今までの活動（各グループを８人程度で動くのが話し合う場合や踊ってみるにしても適当な大きさであった経験から）からして適宜な区分けと考えている。

図１　創作した身体表現を友人同士と互いに見合う

図２　細かい部分の話し合いを常に行う

④グループ毎に音楽に合わせた意味のある動き（感性を生かした）を作る。後に，全員で合わせていく。
⑤グループ毎の動きに喜怒哀楽の動きを入れる。（感性，想像力）
⑥滑らかな部分と激しい部分をいれる。（感情の動き）
(5) 作り上げる期間は３～４週間（課外時間を含み（利用）完成させる）
(6) 発表は舞台上で行う。

Ⅳ-1　授業中の指導者（筆者）の助言

① 授業の度に，代表者に練習の進捗状況を報告させる。その報告からグループ毎に次への練習を促す。活動が停滞しているときには，何故この音楽にこの動きなのかなどを指導者の助言として問いかける。
② 仕上がりの予測図，隊形はどのようになるのかを質問しながら，何故，このテーマにこの隊形が必要なのかなどを問う。
③ 気になる動き（その場にそぐわない動き）にはより良くなるような助言や指導者自らが動きを示し，理解を促す。
④ 完成に近づくと成果を発表することに意識を伴わせ，発表する場所の寸法を考えるように促しつつ，何度も場に合うような動きを吟味するように伝える。感覚的にすぐ動けるように助言していく。
※以上の活動についての助言を与えることで学生たちの意識の中に学生のイメージから生まれた動きが加わり，新鮮なメッセージとして他者に訴えることができると考えている。

Ⅳ-2　授業担当者（筆者）として授業中での学生たちの表現活動の態度についての気づき

① なかなかテーマに沿った音楽が見つからず代表者を決めて活動にかかったにも拘わらず時間が過ぎて行ったようだ。
② 音楽が決まったが，動き（身体表現）をどのように作れば良いか戸惑っていた。
③ 次に代表者を中心とするグループの学生たちが喜怒哀楽，滑らかな部分と激しい部分を取り入れながら身体表現の創作を続けた。学生が作った動きに指導者は何故この動きになるかなど指摘し，もっと気持ちを入れて表現することはできないのか，また，どのような閃きや勘によって表現をしていきたいのかなど尋ねつつ指導する。
④ 何度も練習しては直し，練習しては直すことを続ける。最初の頃は表現の意味も分からず細かな部分の動きさえ表現できなかったが，回を重ねるうちに情緒的な部分が表現の中心に生まれてきた。
⑤ 回を重ね，作品の完成度が増すにつれて個々の学生からさまざまな欲求が増えてきた。何度も友人同士，グループ同士，クラス同士での練習を進め自分たちが何を訴えたいのか，活動の途中であっても話し合う姿が見えた。
⑥ 指導者の意見を受け，何度もグループで或いは，クラス全体で意見を交わしつつ，自分たちの思いを表現したようだ。指導者としては最初から最後まで観察したり意見を与えたりしてかなり高いレベルの身体表現を要求した。大詰めになると学生たちの動きから何が表現したいのか，その動きの中から感情が伝わってきた。それは学生たちが少なからず持っていた感性や，想像力がバランス良く表出したものだと感じることが出来た。

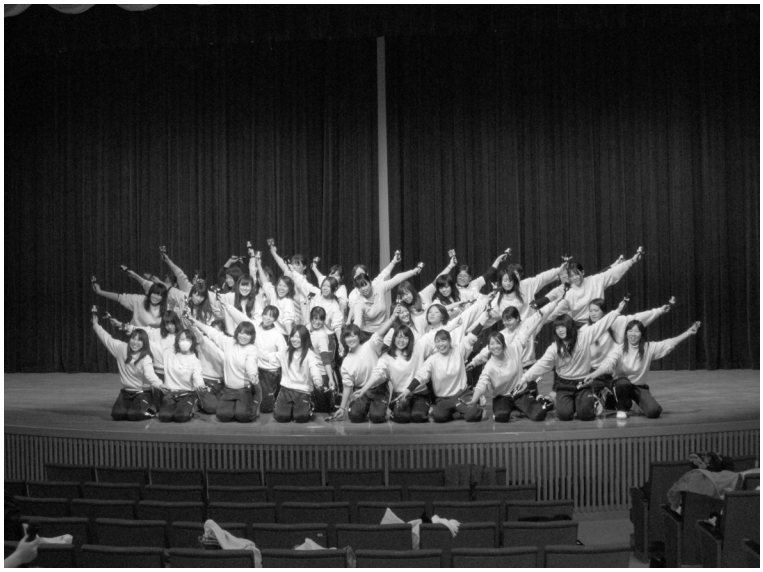

図３　舞台での成果発表（最後のポーズで未来への飛躍を表わしている）

Ⅳ-3　グループ毎のテーマをもとにした身体表現の流れおよび編集使用音源

１組のテーマ　「ディズニー」
木製で既に「鳴子」になっている教材を使用。クラスの「鳴子」の色付けは赤，黄，白，黒色でミッキーとミニーをイメージ（柄は全員一緒にしている。）
以下の音源を使用して喜怒哀楽，滑らかな部分や激しい部分を考えながら表現を作っていた。隊形を変えるところもタイミングを合わせながら何度も何度も練習していたのが印象的であった。 1. サークル・オブ・ライフ《ライオンキング》より　2. true love's kiss《魔法にかけられて》より　3. 彼こそが海賊《パイレーツ・オブ・カリビアン》より　4. 星に願いを《ピノキオ》より　5. アンダー・ザ・シー《リトルマーメイド》より
２組のテーマ「空」（星空→晴れ→嵐→雨上がり→虹）
木製で既に「鳴子」になっている教材を使用。クラスの「鳴子」の色付けはネイビー，レッド，イエロー（柄は全員同じ）
以下の音源を使用しながら，種子の一生に焦点をあてさまざまな困難な出来事を経験する後，平和がもたらさせる様を表現した。 1. ひまわり　作曲 N. O. B. B　2. Aloha E komomai　作詞者不詳　3.《モンスターハンター》より　4. 晴れた日に　久石譲　5. 虹のむこうに　坂田修
３組のテーマ「～虹～」（晴れ・雨・曇り・雪などさまざまな空の表情を表現する）
木製で既に「鳴子」になっている教材を使用。クラスの「鳴子」の色付けは赤，橙，黄，緑，青，紫色で（柄はグループ毎に虹のイメージで揃えていた）
以下の音源を使用しながら，星空からはじまり，晴れから嵐，雨上がり，虹といろいろな身体表現を伴いながら表現豊かに考えていた。星空から晴れへと清々しさが学生の身体表現から伝わってきて，爽やかな感じを感じることが出来た。緩急緩の組み合わせが心地よい。印象的な隊形は虹を想像させる斜めの虹色のレイアウトが美しかった。 1. 海の見える町《魔女の宅急便》より　2. 風の通り道《となりのトトロ》より　3. メーヴェとコルベットの戦い《風の谷のナウシカ》より　4. 急行～対峙《ゲド戦記》より　5. 王蟲の暴走《風の谷のナウシカ》より　6. 荒れた庭《借りぐらしのアリエッティ》より

Ⅴ．「表現」受講生の感性の育成の効果～入学前の音楽経験の有無を手がかりとして～

当該授業にかかわった学生たちの感性が，どのように育成されたかを検討するために学生たちが，大学入学時までに何らかの音楽活動に携わっていたかどうかの過去経験について調査を行った。予測として，ピアノを学んだ経験があれば，感性や想像力，表現力が備わっているのではないかと仮定し，グレード分けの検査結果を参考にすることにした。ただし，感性が音楽のみで醸成されるものではなく本研究においてグレードの高さ即，感性の高さとはいえないことも十分考えられる。手続きおよび結果は以下の通りである。

〈群分け手続き及び結果〉

本大学児童教育学科では基礎技能科目であるピアノ演奏法を能力別グレード制として設けている。従って，入学後，グレード分けをするため音楽能力検査を行っている。グレードのレベル分けはグレード１，２，３と３つに区分している。これまでのデータによれば，入学前にピアノなどの経験がある者はグレード２，グレード３．に分けられる。従って，仮定としてグレード２．から音楽の経験により少しずつ感性が備わっていると考えられる。グレードの決定は入学後弾ける曲を演奏し，検査に立ち会うピアノ教員と学生のこれまでの音楽経験とを照らし合わせ総合的に判定される。グレードのレベルは大まかにグレード１．今までにピアノを習ったり，弾いたりしたことがない。グレード２．幼少時に少し習ったことがあるが，入学まで止めていた。グレード３．楽譜を見ながら弾くことができるレベル或いは，高い技術を持っている　である。

音楽能力検査の結果は次のようであった。入学者合計　124名

①　グレード１は24名（19％）②　グレード２は53名（43％）③　グレード３は47名（38％）

グレード２．３段階が８割を占め，比較的ピアノ経験者が多いと考えられる。

以上が，「表現」の授業受講者の背景である。

先述，Ⅳの授業の最終図である舞台上での発表終了後，学生にアンケート調査を行った。

Ⅵ．　授業の効果を検討するために学生へのアンケート調査

調査対象：「表現」受講学生数：124名

回 収 率：100％

調 査 日：平成23年１月17日～24日

表現Ⅱ　　感性を育てる表現活動　～郷土楽器鳴子（高知）「鳴子」を使って～

以下の質問に答えなさい。

１．身体表現全体のどの部分について作りましたか（自分の意見を出したか）

２．活動にはいるまでと発表を終えた現在とでは心の動きはどのように変わりましたか述べなさい。

３．全体の動きの中でどの部分が貴女の好みですか

４．あなたは今，活動について何を訴えたいですか

５．活動をしていてあなた自身どのようなところが成長したと思えますか

６．好きな場面（部分）を絵で表しなさい

Ⅵ-1　調査のまとめ

ここではアンケート２．３．４．５の問いについての回答に独自な心の動きに関する文言があれば拾い上げその文言が学生たちの心の動きを示している感情と推定した。

（なお，このアンケート結果や練習中の風景（写真）の使用に関しては学生の許可を得ている）。

Ⅵ-1-①　学生たちの意見のまとめ

アンケート２：活動にはいるまでと発表を終えた現在とでは心の動きはどのように変わりましたか述べなさい（心の動きを感じるところを下線で示した）。

a. 活動にはいるまでの気持ちについて

1. 最初は課題をすればよいのだとあまり気が乗らず意見も出せなかった。面倒くさい活動である。どのような形になるか不安ばかりであった。
2. テストや課題がたくさんある中で面倒くさいと思った。また，嫌なときもあり心がすさんだ。活動することのみんなの気持ちがバラバラで大丈夫かと焦った。
3. 活動をはじめたときは内容がまとまらず，かなりの時間が必要であったように思う。

b. 発表を終えたときの心の動きについて（心の動きを下線で示す）

4. 活動したら楽しく，一つのことを作り上げた達成感と満足感が得られた（心の動きが感じられる）。
5. 練習を重ねることでクラスの結束ができ活動していることが，素敵なことだと感じられた。
6. 体で気持ちを伝えることの難しさを感じた。みんなで協力しよう，集中しようとの意識が高まった。
7. 課題の喜怒哀楽の心持ちがはっきりしてきた。何かを表現することにより，人と心を通わせることが，出来ると再確認した。成功させたいという気持ちが，みんなの心を一つにしていった。
8. 最初は自分のことで精一杯だったが，途中から全体が見えるようになり素敵なものを作りたいと思うようになった。１回１回の練習が楽しく，嬉しい時間となった。
9. 一人でも欠けると成り立たなくなるこの活動で大切な役割を果たしたいと思った。
10. 曲や動きの中に気持ちを入れて表現できるようになった。動きに統一感が感じられた。
11. 形や隊形が出来るにつれて，細かい部分までそろえたくなった。

アンケート３と６：全体の動きの中でどの部分が貴女の好みですかまた，好きな場面（部分）を絵で表しなさい。

12. 円形の隊形から千手観音の動き。
13. 舞台の左右から同時に人の列が出てきて交差するスピードある動き。
14. 花開く幸福感で満ちた表現
15. 一枚の花びらになり移動する
16. パイレーツの戦いの部分

アンケート４と５：あなたは今，この活動について何を訴えたいですかまた，活動を通してあなた自身どのようなところが成長出来たと思えますか（心から訴えたいと

ころを下線で示す)。

17. 素直に曲を感じることも作り上げる上で求められることだと考える。
18. 作り上げることは大変なことであるが，大きな成果となる感じがする。
19. 一人一人の存在が大切である。「みんなは一人のために，一人はみんなのために」思いやりの気持ちを忘れず最後まで頑張ることです。力を合わせることの素晴らしさを伝えたい。頑張ることで何かが生まれる。一人ひとりがとても大切な役割を持っている。
20. 音を楽しむ素晴らしさ。音楽と身体表現が繋がっていることを体験した。自分たちの思いを表現する楽しさ。協調性の大切さ。自分を表現できることは生きていく上で自分を支えてくれるものとなる。
21. 充実感が味わえて良い経験になった。練習の大切さ。受け身ではだめだと感じた。頑張る姿勢を持続させたい。言葉でだけでなく体でもこんなにも表現できる。感情を表現して相手に訴える大切さ。
22. どんな環境にあっても負けない強さ。一体感を感じる。自分の思いをのせながら表現していく面白さ。
23. 感性の引き出しが増えることを感じた。それぞれの気持ちで壁を乗り越えられる。「大丈夫」の言葉の強さ。目標に向かって何かを作ることの素晴らしさ。

Ⅵ-1-②　学生の過去の音楽経験とアンケート回答結果との関係

アンケート回答番号１～３

表１　消極的な回答（面倒くさい，不安である）

1グレード	2グレード	3グレード
19名（15%）	22名（18%）	23名（19%）

表２　その他

1グレード	2グレード	3グレード
0名	2名（ 2%）	2名（ 2%）

表３　感性に関する肯定的な回答65名（52%）

1グレード	2グレード	3グレード
14名（11%）	24名（19%）	27名（22%）

表４　その他，感性に関する以外の回答59名（48%）

1グレード	2グレード	3グレード
10名（ 8%）	29名（23%）	20名（16%）

アンケート３．６．について，いろいろな回答があったが，今回は特徴的な動きの好みをあげると次のようであった。

12. 円形の隊形から千手観音の動き。13. 舞台の左右から同時に人の列が出てきて交差するス

ピードある動き。14. 花開く幸福感で満ちた表現　15. 一枚の花びらになり移動する　16. パイレーツの戦いの部分

アンケート４．５．について，いろいろな回答があった。この質問の中で特徴的な文言をあげると次のようであった。素直に曲を感じることも作り上げる上で求められることだと。自分たちの思いを表現する楽しさ。音を楽しむ素晴らしさ。音楽と身体表現が繋がっている。感情を表現して相手に訴える大切さ。自分の思いをのせながら表現していく面白さ。感性の引き出しが増えることを感じた。目標に向かって何かを作ることの素晴らしさ。

Ⅶ. 結果と考察

学生からのアンケート調査の回答結果から次のようなことが考えられる。下線の部分から推測すると，活動のはじめは課題への不安がうかがえる（学生のアンケート回答番号（１．２）。到達点を予測しながら練習回数を重ねていく中で学生たちの心や気持ちの動きは協同作業であることの効果がだんだんと見えてきたため，「鳴子」による身体表現の細かい部分まで，心配りや表現が生まれ，成功させたいという気持ちが芽生えていることが前述同様にアンケートによって感じることが出来た。(学生のアンケート回答番号４．５．６．７．８．10. 11)。 また，意見を出し合うことや，練習を重ねる中で身体表現の綿密さを増加させ，動きがより深まり，心の動きがそれぞれに深化しているような示唆（学生のアンケート回答番号５．８）をアンケートやインタビューを通して知ることが出来た。さらに，学生たちの活動に対する態度，学生同士でかけ声を掛け合う様子から観察すると更に“成功させたいという気持ち”が“みんなの心を一つにしていった”。活動を通して強く感じることが芽生えたのではないかと考える。

このように授業で表現活動をする前とその後の学生の心の動きの回答から抽出すると以上のような結果に到達した。その一つ一つの回答が成長の証となっていると考えることもできよう。上記の回答から少なからず活動により新たな感動，心の動きが感じられ，豊かな感性へと誘う手だてとして確実に育まれたと言っても過言ではない。なお，学生の過去の経験と感性育成との関係は表１．２（９頁 a.）よりグレード間に差はないと考えられる。また，表３．４（９頁 b.）より感性に関し，肯定的あるいは敏感な反応を示したのはグレード２，３の学生たちである。調査対象者数が少ないので断定は出来ないが，大学入学までの音楽に関わる過去の経験が大学の授業「表現」を通して感性育成にプラスに関与している傾向が窺われた。よって大学入学時までのピアノ音楽経験も無視はできないと考えられる。以上の学生のアンケート調査やインタビューの調査のまとめから次のようなことが分かった。

(1) 調査によってまずは学生の心の動きを垣間見ることができた。

(2) さらに，学生たちの気持ちが伺えることは「鳴子」の表現活動を自分のものとして捉え，クラス全員の学生同士の心が通い合うと同時に積極的に作品を作り上げようとする気持ちが高揚し，高次元へと感性や想像力を働かせることが表現活動には大切であると認識する場面を目にすることが出来た。

(3) このように遅々とではあるが，感性が備わっていくことによって活動が楽しくなることも理解できた。また，感性が備わることで学生生活の中に趣のある活動に生かすことができることも理解できる。これらの結果から，総合的な表現力のスキルの向上を見ることができた。そして，感性や表現力の観点から，総合表現「鳴子」の授業を受講した学生は授業

を受講する前より表現活動の幅が優位に広くなっていることが感じられた。総合活動「鳴子」では，皆で豊かな感性を育てるということが目標であるが，果たして学生はそれをどのように受け止めているのか，「鳴子」はみんなで協力して創り上げる作業であり，仲間同士の協調性を養う格好の場であることも理解できた。表現に関する指導書や解説書を見ても必ずと言って良いほど「豊かな感性」の領域と記してある。学生たちからのアンケート調査の結果からも伺えることだけれども保育者自身が感性豊か（表現力に目覚めること）であることが，子どもたちを人間らしく育てていく上での源であり影響を与えるものだと信じるのである。

Ⅷ. ま　と　め

本稿は感性を育てるための大学生による試みとして，「表現」の授業前・後の学生たちへのインタビューやアンケート調査によって検討したものである。学生たちは自分たちが作品を作っていく上で，友人同士，触発仕合い，影響を与えたりしながら目に見えない心の動きや心の高まりを感じていた。そのことは彼女らの活動時の表情や動きを観察することにより理解できた。また，インタビューやアンケート調査にも感性の成長が伺える文言を目にすることが出来た。

学生にとってこの領域「表現」は未知の世界であったに違いない。しかしながら，クラス単位，グループ単位で意見を出し合いながら，総合表現を作り上げていったプロセスと，その結果については高いレベルの評価を与えることが出来るように思う。

今回は，将来，保育士を目指している学生の「総合表現」に焦点をあてたが，子どもたちに目を向けてみると子どもたちにとって表現するということは毎日が総合表現の連続といえる。歌い，語り，描き，動くなど別に教わるまでもなく，自発的にそれらの活動を行うのである（柴田1994：19）。毎日の保育の中に少なからず保育者自身が経験した活動を子どもたちの活動の中に投影することの楽しさ，うれしさ，大切さを伝えていって欲しいと思う。それが豊かな感性を育む原点であると考えるからである。

引　用　文　献

藤江　充・梅澤由希子編　1993『実践を支える保育７　表現』16～17頁，東京 福村出版。
古市久子・遠藤晶纏・寺尾　正著　2001「幼児の音楽教育における黎明期の実際とその表現的意味」大阪教育大学紀要第Ⅳ部門，第50巻，第１号，99頁.
厚生労働省　2008『保育所保育指針解説書』東京 フレーベル館。
文部科学省　2008『幼稚園教育要領解説』東京 フレーベル館。
音楽教育研究協会　1990『幼児の音楽教育　～音楽的表現の指導～』東京 音楽教育研究協会。

Zusammenfassung

Diesmal überprüfte ich, inwiefern mit der Einführung des Heimatinstrumentes “Naruko” in das Unterrichtsfach “Ausdruck” sowie durch die Gesamtausdruckstätigkeit die Empfindungskraft geschult werden kann.

Bei meiner Untersuchung habe ich eine Umfrage bzw. ein Interview mit den Studenten

bezüglich ihrer Empfindungskraft durchgeführt, nachdem sie an dem Unterricht “Ausdruck” teilgenommen hatten. Dabei wurde untersucht, ob man bei den Studenten durch die Teilnahme an dem Unterricht “Ausdruck” einen Schulungseffekt ihrer Empfindungskraft feststellen kann.

Als Ergebnis verschiedener Analysen konnte man feststellen, dass die allgemeine Fähigkeit der Ausdruckskraft der Studenten verstärkt wurde. Weiterhin konnte man von dem Gesichtspunkt der Empfindung bzw. der Ausdruckskraft wohl bemerken, dass die Studenten, nachdem sie an dem Unterricht Gesamtausdruck “Naruko” teilgenommen haben, eine breitere Ausdruckstätigkeit besitzen als vor dem Unterricht. Somit kann man wohl annehmen, dass die Empfindungskraft durch verschiedene Ausdruckserfahrungen geschult wird.

〔2011. 9. 29 受理〕